

自己調整学習を主題とするビデオとオンラインレポートを 活用した授業の学習者意識調査

仲林 清^{*1,2}

*1 千葉工業大学

*2 熊本大学

Survey of Learner's Perception on a Lesson on the Subject of Self-regulated Learning Using Video Content and Online Report

Kiyoshi Nakabayashi^{*1,2}

*1 Chiba Institute of Technology

*2 Kumamoto University

自己調整学習の概念や方略を、学習者が意識して活用することを促進するための授業の試行と評価を行った。大学1年生の学生を対象に、学習理論や自己調整学習に関する知識を与えたのち、これらの理論の観点から、中学生の学習の様子を描いたドキュメンタリービデオを視聴させた。その後、自らの学習経験とビデオの内容を対比したレポートを提出させた。入学時と授業後アンケートの比較から、学習者の学習経験と授業評価の関係を調べた。

キーワード: 自己調整学習, ドキュメンタリービデオ, 学び方の学習, 既有知識の活用

1. はじめに

急速な社会構造の変化に対応するために、自律的に学び続ける能力の重要性が叫ばれている⁽¹⁾。学校教育においてもこのような力の育成が重視されており⁽²⁾。いわゆる21世紀型スキルの中にも「学び方の学びとメタ認知 (Learning to Learn and Metacognition)」が位置付けられている⁽³⁾。自ら学ぶ力に関する学術的な理論や知見としても、メタ認知⁽⁴⁾⁻⁽⁷⁾や自己調整学習⁽⁸⁾⁻⁽¹⁰⁾、熟達化⁽¹¹⁾などに関するものが数多く得られている。

メタ認知や自己調整学習を促進するための教授方法についても様々な研究があるが、多くは個別の課題・教科・分野を対象としたものとなっている。文章の読み・書きや数学・理科に関するメタ認知⁽⁴⁾⁻⁽⁶⁾の研究や、国語・算数・理科・英語・心理学・統計学などの教科で小学生から大学院生までの学習者に自己調整学習を身につけさせる実践授業が行われている⁽⁸⁾⁻⁽¹⁰⁾。

これらの先行研究が、特定教科の授業において、メタ認知や自己調整学習を促進させる介入を行うものであるのに対し、本研究は、大学生を対象に、学習に関する学術的・体系的知識と自らの学習経験とを結びつけて内省・概念化させ、以後の学習活動におけるメタ認知や学習方略の活用を促進することを意図している⁽¹²⁾⁻⁽¹³⁾。大学生は、メタ認知や自己調整学習の能力を

誰もが身につけているわけではないが、小中等の学習者に比べれば、上記のような学術的・体系的知識を理解するのに十分な知的水準を有していると仮定できる。また、勉強やスポーツ・趣味・アルバイトなどを通じた学習過程に関する経験があり、これを客観的に振り返る能力も有していると期待できる。そこで、これらの学術的・体系的知識と学習者自身の経験・既有知識とを結びつけさせて内省・概念化を促進する。自己調整学習は、場面限定的・文脈依存的で、全ての場面で自己調整している学習者は存在しない、と言われている^{(10)(p.12)}。逆に言えば、自らの学習経験を自己調整学習の立場から内省・概念化すること⁽¹⁴⁾ができれば、それをこれまでの経験とは異なる対象や状況の学習に転移させることも期待できる。

具体的な授業には、筆者らがこれまで、技術イノベーションや組織における問題解決といった、抽象度が高く正解が一意に定まらない分野の学習に適用して効果を確認したドキュメンタリービデオとオンラインレポート提出を組み合わせた授業設計の枠組み⁽¹⁵⁻¹⁶⁾を適用する。この授業設計では、まず学習主題に関する体系的知識を説明する。次に学習主題に関連する観点を提示してドキュメンタリービデオを視聴させ、ビデオの登場人物の行動や考えを、体系的知識や自らの経験と関連付けて解釈させる。そして、その内容をレポートにまとめさせ、次の授業で全員のレポートを配

布・閲読させて、自他の考えを比較して吟味させる。
 このような設計で、自らがこれまで行ってきた学習行動が、様々な学習理論の概念から解釈できることに気付かせ、以後の行動を客観的に観察し意識的に修正することを促すことを意図している。

なお、本稿は先に発表した授業の試行結果⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾を新たな観点を加えて評価したものであり、特に、学習者の入学時と授業後のアンケートの比較から、学習者の学習経験と授業評価の関係を調べることを目的としている。以下、第2章で、本授業設計の学習目標について述べる。第3章ではビデオとオンラインレポートを活用した授業設計を示す。第4章でアンケート、レポートの内容を調べた結果を示し、第5章で考察とまとめを行う。

2. 自己調整学習に関する学習主題

本授業では、自己調整学習^(5,7)を中心に学習理論や学習の動機づけを取り上げる。自己調整とは、教育目標の達成を目指して学習者が自ら作り出す思考・感情・行為であり、学習過程において、メタ認知・動機付け・行動に能動的に関与することを自己調整と呼ぶ。特に、自己調整学習方略・自己効力感・目標への関与が重要とされている⁽⁹⁾(pp.16-17)。

自己調整学習は、図1に示す予見段階、遂行段階、自己内省段階からなる個人的フィードバック・ループとしてモデル化される⁽¹⁰⁾。

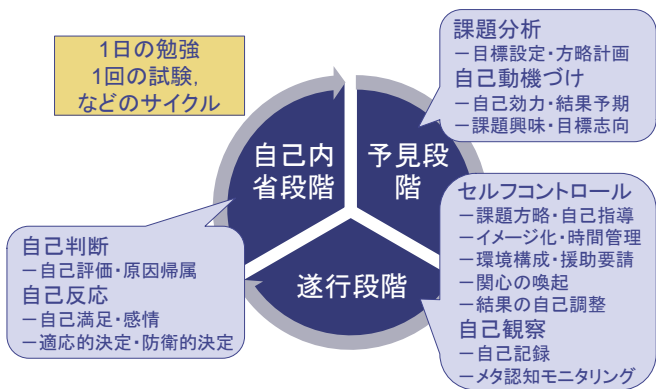


図1 自己調整学習のサイクル

予見段階は、学習に先立って、学習を自己調整する準備と自己動機付けを行う段階である。準備においては、課題の目標設定や課題を解くための方略の計画立てが行われる。動機付けは、自己効力、結果予期、課

題興味などに依っていて、さらにこれは、課題の目標設定や方略計画に関係している。すなわち、自己調整学習に上達した学習者は、明確で具体的な目標設定や方略の計画を立てることができ、これによって、自己効力や結果予期に起因する高い学習動機を得ることができる。

遂行段階は、実際の学習や課題解決に対応していて、セルフ・コントロールと自己観察の要素からなっている。セルフ・コントロールは、課題固有の解決方略と課題に依存しない一般的な方略からなる。一般的な方略としては、抽象的な情報を適切な心的イメージで捉えるイメージ化、課題に必要な時間を見積もる時間管理、先生や親に適切な支援を求める援助要請、などが挙げられる。自己観察は、メタ認知モニタリング(セルフ・モニタリング)と自己記録が含まれる。自己調整学習に上達した学習者は、遂行過程のセルフ・モニタリングを行い、これに基づいてセルフ・コントロールを行って方略を修正していくことができる。

自己内省段階は、学習や課題解決の結果に関わる段階で、この段階が次の学習の予見段階に影響する。自己内省段階には、自己判断と自己反応が含まれる。自己判断は、遂行結果を目標基準と比較する自己評価、および、遂行結果の原因を能力・努力・方略使用などの原因と結びつける原因帰属からなる。自己反応は、自己満足/感情と適応的/防衛的決定に分類される。前者は自己判断に対する情動的な決定で、一般に、学習者はマイナスの感情を生じる学習活動を避ける傾向がある。適応的決定は、使用した方略が良くなかったという原因帰属を行った場合に、次回は方略を修正する、といった決定を行うことである。逆に、防衛的決定は、能力に原因を帰属させ、マイナスの感情から逃れるために遅延や課題回避を行うことである。自己調整学習に上達した学習者は、自己評価を行い、努力や方略に原因を帰属し、これらを修正する適応的決定を行うことができる。

本授業設計では、自己調整学習を主要な学習主題とするが、特に後述するドキュメンタリービデオの内容との関連から、以下を具体的な学習主題とした。

- 1) 予見段階における目標設定・動機付け・自己効力感
- 2) 遂行過程のセルフ・モニタリング

- 3) 自己内省段階における自己評価や原因帰属, それによる適応的/防衛的反応
- 4) 自己調整学習を促進するための教師の介入

3. 授業設計

3.1 概要

前章で述べた自己調整学習の理論は, 体系的にまとめられたものであるが, 実際に自己調整学習が行われる状況や場面は多様であり, 学習者の思考や感情, 学習方略もさまざまで, 唯一の正解が存在するようなものではない. 従って, 単なる知識付与型の教育形態では十分な教育効果を得ることは困難で, 自己調整学習が行われる実際の文脈を学習者に提示する必要があると考えられる. また, 大学生の学習者は, 自身で意識していなくても, 自己調整学習の概念で説明可能な学習経験を有していると思われる⁽⁹⁾(pp.68-82). 従って, コルブの経験学習モデル⁽¹⁴⁾に鑑みて, これらの経験を内省・概念化させ, 体系的な知識と結び付けさせることができれば, これまでの経験とは異なる学習対象においても自己調整学習の転移を促進できると考えられる.

そこで本授業では, ドキュメンタリービデオ視聴とオンラインレポート提出を組み合わせた図2の枠組み⁽¹²⁾⁽¹³⁾を適用する. この授業設計では, (1) 学習者の既有知識の活用, (2) 主題に関する真正な状況・文脈の提示, (3) 他者の考え自らの考えと対比する機会の設定, という方針をとる. 具体的には, 学習の主題に即したドキュメンタリーを視聴させ, これに関するレポートを課す. 次の授業直前までにレポートをオンラインで集約して授業で配布し, 教員が内容を適宜紹介する.

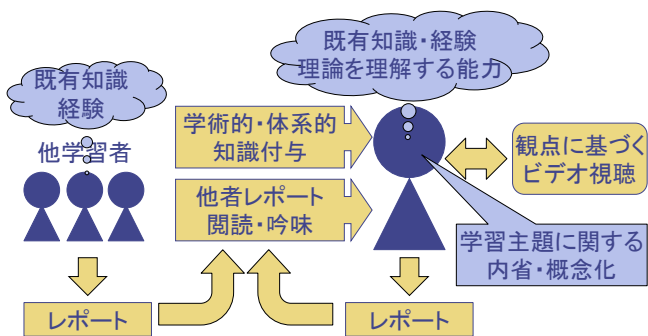


図2 授業設計の枠組み

ドキュメンタリービデオは後述するように, 学習主題を直接解説した教材ビデオではないので, 学習者は, 現実の学習場面で生じている事象や登場人物の言動の背景にある学習主題を, 講義の知識に結び付けて能動的に読み解く必要がある. これによって, 学習主題を単なる知識としてではなく, 文脈を含めて理解し, さらに学習者自身の経験と対比させることを意図している. レポートの提出と配布は, 自らの考えを他者の考えや経験と対比しながら深めることを狙っている. 上記のように, ビデオは, 学習主題を直接的に解説したのではないので, レポートの内容は, 学習者の着目点や経験との対比も含めて, 非常に多様なものになることが期待される. このように, レポートの提出・配布で, 自他の解釈や意見を対比しながら, 学習主題についての理解を深化させることが狙いである.

3.2 ドキュメンタリービデオの内容と解釈

授業ではふたつのドキュメンタリービデオを用いた. ひとつは, NHKの「あしたをつかめ」というシリーズの「#33 塾講師」⁽¹⁷⁾ (以下, 塾講師), もうひとつは, やはりNHKの「目撃日本列島」というシリーズの「負けて強くなれ 愛媛・将棋道場の日々」⁽¹⁸⁾ (以下, 将棋道場) である. いずれも視聴時間は25分程度である. 中学生とその指導者が主人公で, 大学生の学習者が自身の過去の学習経験と結び付けやすいと思われる. 以下に, 塾講師の概要と学習主題に沿った解釈を述べる. 将棋道場の概要・解釈については先行研究⁽¹²⁾を参照されたい.

塾講師は, 講師の増田さんと増田さんの上司, および, 増田さんの生徒の女子中学生徳永さんが主な登場人物である. あらすじは以下のとおりである.

徳永さんは数学が苦手で, 成績を良くしたいと考えて塾に通っている. しかし, 成績が伸びずやる気を失っている. 増田さんとの面談では「周りが天才だから」と, 自信を無くしている. 増田さんは, 努力すれば成績が伸びることを生徒に知ってもらいたいと, クラスで小テストを実施するが, 徳永さんは合格できない. 再テストでも合格できず, 増田さんは休みの日に上司に相談する. 上司は, 「先生が押し付けると, 生徒はその場限りでし

か勉強しない。自発的に勉強するような施策が大事だ」とアドバイスする。どうすればよいか考えた増田さんは、自習ノートと徳永さんに渡し、「科目はなんでもいいから、目標を書いて自習し、やった結果を見せてほしい」と告げる。徳永さんは、自分で数学を自習することに決め、「その日間違ったところを復習する」という目標を決め、「繰り返し学習すればできるようになるかな」と発言する。次の小テストで、徳永さんは初めて1回で合格し、「スッキリした」と喜ぶ。

このドキュメンタリーにおける徳永さんの言動は、自己調整学習の観点から以下のように解釈できる。徳永さんは、数学に苦手意識があり、自己効力感がない。「周りが天才だから」という発言から、成績の悪さを能力に原因帰属していることがうかがえる。また、間違えたところを振り返ることもしておらず、防衛的な感情が出ていて、適応的な決定ができていない。このため、目標設定も漠然としている。ビデオの中では、徳永さんの書いた冬休みの目標が「積極的に勉強に取り組む」という非常に漠然としたものであることが示されている。

それに対して増田さんは、徳永さんの能力帰属の考え方を方略帰属に変えさせようと小テストを実施するがうまく行かない。そこで、徳永さんの適応的決定を促すために、自習する科目・目標を自分で決めるように告げて、予見段階における目標設定を促し、また自習ノートによる努力の可視化の仕組みを作っている。これに対して徳永さんは、「数学でその日間違ったところを復習する」という近時的で具体的な学習目標を自分で決め、「繰り返し学習する」という方略で自習を行う。この結果、小テストに合格し、プラスの感情を得ることができた。

3.3 授業の進め方

授業は全体で4コマの構成である。これまでの授業実践⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾では一本のビデオを用い、ビデオ視聴とレポート提出を2回繰り返したが、今回は前述の二種のビデオを用い、合計3回の視聴とレポート提出を行った。使用したビデオは学習主題を直接解説した教材ビデオではないので、学習者は学習主題の観点からドク

ュメンタリーの内容を解釈する必要がある。しかし、1回のビデオ視聴では、学習者はビデオのストーリーを追うだけで精いっぱい、前節で議論したような踏み込んだ解釈を行うのは困難と思われる。また、二種のビデオは表層的なストーリーは全く異なっているが、学習主題の観点からは、共通点と相違点がある⁽¹²⁾。そこで、まず負荷の軽い観点を意識させて、2本のビデオを1回ずつ視聴させる。2回目の視聴では、まず、他者のレポートを配布して、特徴的なものや学習主題に適合したものを適宜紹介したうえで、2本のビデオを比較させる踏み込んだ観点を課題として示してレポートを作成させる。1コマ目で塾講師のビデオを視聴させる際のレポート課題、および、3コマ目で塾講師と将棋道場の双方のビデオを視聴させる際のレポート課題は以下のとおりである。詳細については先行研究⁽¹²⁾を参照されたい。

【1 コマ目】ビデオを視聴して、塾講師（増田さん）が女子生徒（徳永さん）の学習を促進するためにやっていることを、自分の学校・家庭・塾・習い事・部活などでの学習経験と結びつけて、学習の動機付けや学習理論の観点から説明してください。塾講師や生徒の発言や行動に注意してください。（2～300字）

【3 コマ目】前々回・前回のビデオ（全50分）を再度視聴し、他の人のレポートも参考にして、学習理論・動機付け・自己調整学習の概念を用いて、以下を説明してください（1000～1500字）

- 双方のビデオの学習者の学習が促進されていなかった要因は何か？両者の共通点や相違点は何か？学習者の感情や考え方、学習方法に注意すること
- 学習を促進するために、双方のビデオの指導者はどのような意図でどのように、学習者に働きかけているか？
- 指導者の働きかけは、学習者の感情や考え方、学習方法、理解の点で効果があったか？効果が得られた／得られなかった理由は何か？学習者は今後、自律的に成長できると思うか？

4. 学習者の反応

情報系学科の1年生「情報社会とビジネス」という科目中で、2015年度前期に授業を実施した。初回の授業で後述する入学時アンケートを実施した。さらに、11回目から14回目の授業で3章に述べた授業を行い、その後、授業後アンケートを実施した。以下、両アンケートの内容と、それらに基づく学習者の学習経験と授業効果の関係について述べる。

4.1 入学時アンケート

このアンケートは、入学直後の学習者に対して、学習観・学習動機・進路に関する意識などを調べるために行っている。全55項目で、7件法で実施している。今回の回答者は164名であった。結果の一部を表1に示す。

表1 入学時アンケート（7段階、164名）

質問	平均（標準偏差）
卒業した後、就職したい業種や職種がある	5.30 (1.24)
4年間で卒業できるかどうか不安だ	4.65 (1.78)
人の役に立つために働きたいと思う	5.27 (1.37)
働くことを通じて成長していきたい	6.06 (1.08)
働くことの意味をよく考える	4.70 (1.51)
友人は多いほうだ	4.18 (1.49)
授業がわからないときは、友だちに相談する	5.52 (1.34)
文章を書いたりする時、自分の考えをまとめるのに苦勞する	5.26 (1.49)
教育番組や授業で見る教材ビデオはおもしろくないと思う	3.76 (1.37)
勉強を自発的にやっている	4.04 (1.54)
学習内容が何に役に立つか考えて勉強している	4.76 (1.39)
勉強することとは、知識を暗記することだと思う	3.65 (1.43)
考える道筋が間違っているけど結果が合っているほうが大事だ	4.12 (1.58)
勉強したことが応用できないと意味が無いと思う	5.56 (1.13)
勉強のやる気を出すために工夫したり意識していることがある	4.77 (1.35)
効果があがるように勉強方法の工夫を意識している	4.51 (1.35)
学習内容が理解できないときは、複数の参考書で調べる	4.65 (1.51)
難しい問題が苦勞して解けたときは、次もがんばろうという気になる	5.21 (1.45)
まちがえた場合は、なぜまちがえたのか理由をよくかんがえる	5.22 (1.28)

4.2 授業後アンケート

3章に述べた3回のレポートをすべて提出し、さらに授業後のアンケートに回答した学生は112名であった⁽¹³⁾。ただし、一部のアンケート項目に回答しなかった学生もあり、項目によって数名の欠損がある。表2に結果を示す。

表2 授業後アンケート（7段階、112名）

質問	平均（標準偏差）
内容は理解できた	5.73 (1.03)
内容は役に立った	5.51 (1.15)
内容に納得した	5.58 (1.10)
学習の際に、自己調整学習で挙げられていることを意識していた	4.18 (1.38)
このような内容を今後も学んでみたい	5.15 (1.22)
今後の大学での学習を進めるうえで参考になった	5.50 (1.09)
社会に出てからもこのような考え方は参考になると思った	5.77 (1.14)
「学び方」に関する考え方が深まった	5.67 (0.93)
「学び方」に関する考え方が変わった	5.46 (1.10)
自分の経験と結びついた	5.67 (0.91)

4.3 入学時と授業後の意識の関係

入学時と授業後の意識の関係を調べるために二つのアンケートの相関を調べた。対象は、3回のレポートを提出し、両方のアンケートの全項目に回答した学習者100名である。表1と表2の各項目の相関を調べた。結果の一部を表3に示す。ここでは特に明確な相関がみられた項目、および、特徴的な項目を示している。

まず、授業後アンケート（項番8~13）については、項番10「学習の際に、自己調整学習で挙げられていることを意識していた」以外は互いに正の相関が見られた。一方、入学時アンケートの項目については、項番1「働くことを通じて成長していきたい」と、授業後アンケートの項目も含めた他の項目と比較的高い正の相関が見られた。また、項番2「文章を書いたりする時、自分の考えをまとめるのに苦勞する」、項番3「教育番組や授業で見る教材ビデオはおもしろくないと思う」は、他のいくつかの項目と負の相関が見られた。項番4「学習内容が何に役に立つか考えて勉強している」、項番6「勉強のやる気を出すために工夫したり意識していることがある」、項番7「学習内容が理解できないときは、複数の参考書で調べる」は互いに正の相関があり、項番6は授業後アンケートの項目のいくつ

表3 入学時・授業後アンケートの相関（項番 1~7：入学時，項番 8~13 授業後，100 名）

項番	質問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	平均 (S.D.)
1	働くことを通じて成長していきたい	—	-.31**	-.18 ⁺	.32**	.01	.46**	.18 ⁺	.35**	.27**	.20*	.26*	.27**	.31**	6.00 (1.06)
2	文章を書いたりする時、自分の考えをまとめるのに苦労する	-.31**	—	.16	-.10	.12	-.23*	-.12	-.12	-.11	-.14	-.33**	-.29**	-.24*	5.24 (1.43)
3	教育番組や授業で見る教材ビデオはおもしろくないと思う	-.18 ⁺	.16	—	.03	-.03	-.24*	.04	-.17 ⁺	-.17 ⁺	.02	-.23*	-.21*	-.13	3.70 (1.30)
4	学習内容が何に役に立つか考えて勉強している	.32**	-.10	.03	—	-.15	.51**	.38**	.08	.11	.01	.23*	.04	.13	4.79 (1.34)
5	考える道筋が間違っているけど結果が合っているほうが大事だ	.01	.12	-.03	-.15	—	-.14	-.12	.02	-.04	.11	-.06	-.04	.01	4.01 (1.38)
6	勉強のやる気を出すために工夫したり意識していることがある	.46**	-.23*	-.24*	.51**	-.14	—	.35**	.25*	.18 ⁺	.18 ⁺	.24*	.18 ⁺	.33**	4.73 (1.31)
7	学習内容が理解できないときは複数の参考書で調べる	.18 ⁺	-.12	.04	.38**	-.12	.35**	—	-.03	-.01	.13	.06	.08	.09	4.69 (1.45)
8	内容は役に立った	.35**	-.12	-.17 ⁺	.08	.02	.25*	-.03	—	.65**	.11	.47**	.47**	.42**	5.52 (1.07)
9	今後の大学での学習を進めるうえで参考になった	.27**	-.11	-.17 ⁺	.11	-.04	.18 ⁺	-.01	.65**	—	.07	.49**	.41**	.47**	5.52 (1.11)
10	学習の際に自己調整学習で挙げられていることを意識していた	.20*	-.14	.02	.01	.11	.18 ⁺	.13	.11	.07	—	.16	.10	.22*	4.19 (1.35)
11	「学び方」に関する考え方が深まった	.26*	-.33**	-.23*	.23*	-.06	.24*	.06	.47**	.49**	.16	—	.54**	.58**	5.71 (0.89)
12	「学び方」に関する考え方が変わった	.27**	-.29**	-.21*	.04	-.04	.18 ⁺	.08	.47**	.41**	.10	.54**	—	.36**	5.41 (1.10)
13	自分の経験と結びついた	.31**	-.24*	-.13	.13	.01	.33**	.09	.42**	.47**	.22*	.58**	.36**	—	5.65 (0.91)

*: $p < 0.1$, **: $p < 0.05$, ***: $p < 0.01$, 赤字：正の有意な相関，青字：負の有意な相関

かとも正の相関が見られた。項番 5「考える道筋が間違っているけど結果が合っているほうが大事だ」はいずれの項目とも相関は見られなかった。

5. 考察

前章の結果に対していくつかの考察を行う。

まず、顕著なのは、入学時アンケートの項番 1「働くことを通じて成長していきたい」と他の項目に正の相関が見られたことである。入学時アンケートでは他にも「人の役に立つために働きたいと思う」など卒業後の進路に関する項目を尋ねたが同様の傾向が見られた。この傾向の解釈は難しいが、自己効力感が高く将来のことを積極的に捉えている学習者に対して、自己効力感を重視する自己調整学習の概念が受け入れやすかった、と解釈することもできる。「周りが天才だから」と発言している学習者が、自分で目標設定して自己効力感を高める、というビデオの内容の影響も考えられる。

次に、項番 2「文章を書いたりする時、自分の考えをまとめるのに苦労する」は、他の項目と負の相関が見られた。特に、項番 11, 12 の学び方に関する考え方の変化・深化や項番 13 の自分の経験との結びつきに

ついては、有意な負の相関がある。これについても解釈は難しいが、このような学習者は、学習結果を能力に原因帰属する傾向が高く、そのため自己効力感が低いために、自分の経験とも結びつかず、授業に対する評価が低いことが考えられる。また、ビデオを視聴し、他者のレポートも勘案しながらレポートを書く、という授業形式が、考えをまとめることに苦手意識を持っている学習者に負の影響を与えていることも考えられる。

項番 3 の「教育番組や授業で見る教材ビデオはおもしろくないと思う」も、項番 11, 12 の学び方に関する考え方の項目と負の相関があるが、これはビデオを視聴するという授業形式の影響と考えられる。

項番 5 の「考える道筋が間違っているけど結果が合っているほうが大事だ」は、学習者の「結果主義」の学習観を表すと考えられる項目であるが、いずれの項目とも相関は見られなかった。強いて言えば、負の相関係数となっている項目が多いが有意性はない。この項目は、学習者個人の学習動機や学習方略と異なり、これまでに受けてきた教育環境の価値観を反映していることも考えられる。

項番 4「学習内容が何に役に立つか考えて勉強して

いる」、項番 6「勉強のやる気を出すために工夫したり意識していることがある」、項番 7「学習内容が理解できないときは、複数の参考書で調べる」は互いに正の相関がある。これらの項目は、学習習慣や方略に対応すると考えられる。このうち、項番 4 と 6 は項番 11 と相関があり、さらに項番 6 は項番 8, 13 とも相関がある。項番 6 のような意識を有する学習者は、自己効力感を高める工夫を意識的に行っていて、「学習に対する動機付け」の観点で、「授業が役に立った」、「学び方」に関する考え方が深まった、「自分の経験と結びついた」と授業を評価していることが示唆される。

また、本研究の枠組みは、3.1 で述べたようにコルブの経験学習の考え方を踏まえたものとなっている。従って、学習経験、特に、失敗経験と授業評価の間に相関が見られることが期待される。しかし、今回はこれを裏付けるような結果は得られなかった。授業後アンケートの「学習の際に、自己調整学習で挙げられていることを意識していた」は 7 件法で平均 4.18 と高い値ではなく、他の授業後アンケートの項目との相関も、項番 13 の「自分の経験と結びついた」以外とは見られなかった。また、表 1 で挙げた項目で、学習経験に関係すると思われる「授業がわからないときは、友だちに相談する」、「難しい問題が苦勞して解けたときは、次もがんばろうという気になる」、「まちがえた場合は、なぜまちがえたのか理由をよくかんがえる」などの項目と、授業後アンケートの項目との間にも目立つ相関は見られなかった。相関が見られなかったということは、学習経験によらず一定の授業評価が得られた、と考えることもできるが、学習者のレポート・自由記述アンケートからの学習経験やビデオの着目箇所分析、学習経験に関するより具体的なアンケートの実施などの方法で、さらに詳しく検証を行う必要がある。

6. まとめと今後の課題

自己調整学習の概念・方略の意識的活用の促進を目的とする授業の試行と評価を行った。学習者の過去の学習経験が授業評価にどのような影響を与えているかについて分析を行うため、入学時と授業後に行ったアンケートの相関を調べた。その結果、将来の進路につ

いて意欲的な学習者、学習に対する動機付けを意識している学習者に授業を高く評価する傾向が見られた。一方、考えをまとめることが苦手な学習者の評価は低い傾向となった。これらは、個別具体的な学習経験というよりも、自己効力感や学習観が授業評価に影響を及ぼした結果と考えることもできる。

今後は、学習者の学習経験・学習観と授業評価・レポート内容の関係の分析を行い、学習効果の確認を行う。そのために、レポート・自由記述アンケートからの学習経験やビデオの着目箇所分析、学習経験に関するより具体的なアンケートの実施などを進めていく。特に、自己効力感が授業評価に影響を及ぼしていることが考えられるので、この点について、自己調整学習を促進する他の要因の影響も含め、さらに検討を行う。

また、現在は、ビデオの内容と自分の学習経験を結び付けてレポートを記述させているが、自分の学習経験だけを記述するレポート課題は実施していない。まず自分の学習経験のみに関するレポートを提出させて、自身の経験を明確に意識させてからビデオ視聴を行うことも検討する。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26560127 の助成を受けた。

参考文献

- (1) 日本経済団体連合会：“次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革”，一般社団法人 日本経済団体連合会 (2014)
- (2) 中央教育審議会：“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）”，中央教育審議会 (2012)
- (3) P.グリフィン、他（編）、三宅なほみ、他（監訳）：“21世紀型スキル：学びと評価の新たなカタチ”，北大路書房 (2014)
- (4) Bruer, J.T.: “Schools for Thought: A Science of Learning in the Classroom”, MIT Press (1993)
- (5) Dunlosky, J. and Metcalfe, J.: “Metacognition”, Sage (2009)
- (6) 三宮真智子（編）：“メタ認知”，北大路書房 (2008)
- (7) 市川伸一（編）：“発達と学習”，北大路書房 (2010)
- (8) Schunk, D. H. and Zimmerman, B. J.:

- “Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice”, Guilford Press (1998)
- (9) 伊藤崇達：“自己調整学習の成立過程”，北大路書房 (2009)
- (10) 自己調整学習研究会（編）：“自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ—”，北大路書房 (2012)
- (11) 金井壽宏，楠見孝（編）：“実践知”，有斐閣 (2012)
- (12) 仲林 清：“自己調整学習を主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業設計の検討と試行”，日本教育工学会研究報告集，JSET15-4, pp.63-70 (2015)
- (13) 仲林 清：“自己調整学習を主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業の試行と評価”，教育システム情報学会研究報告, 30(5), pp.33-40 (2016)
- (14) Kolb, D. A.: “Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development”, FT Press (1983)
- (15) 仲林 清：“技術イノベーションを主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業実践”，教育システム情報学会誌, Vol.30, No.2, pp.172-186 (2013)
- (16) 仲林 清：“組織における問題解決を主題とする ビデオとオンラインレポートを活用した授業実践”，教育システム情報学会誌, Vol.32, No.2, pp.171-185 (2015)
- (17) NHK：“あしたをつかめーしごともくらしも #033”，<http://www.nhk.or.jp/u29design/ashitsuka/033/> (2014)
- (18) NHK：“負けて強くなれ ～名門将棋道場の日々～”，http://www.nhk.or.jp/matsuyama/rashinban/details_program_04259.html (2012)